

発行

ひたちなか市
教育委員会
生涯学習課☎029-262-4121
内線/335・336発刊の
ご挨拶

この度、ひたちなか市では、従来発行していた「いまを創る あすを創る 広報紙“学・遊”」を改め、行政の情報だけでなく、まちのことや年中行事、市民の情報を中心に編集した「生涯学・遊 かわら版」を発行する運びとなりました。

ますます複雑化する社会において、この情報紙が人それぞれに生きがいを求め、豊かで潤いのある人生を送るために、少しでもお役に立てれば、と願っております。

今も昔も **インターナショナル** な人々

どれだけ知っていますか?
ひたちなか市のこと。

天空に羽ばたく夢

勝倉生まれの
民間初の飛行家“武石 浩玻”

■時は大正時代初め、1913年(大正2年)5月4日。京都・深草練兵場に集まった数十万人の見物客は民間人初の飛行家“武石浩玻”の操縦する飛行機を見守っていました。すると突然、飛行機が高度を下げ、次の瞬間地面に激突。これが、その前日に民間人として初めて空を飛んで見せた武石浩玻の壮絶な最期だったのです。



武石浩玻
(1885~1913)

■武石浩玻は勝倉生まれ。18歳で単身渡米し、サンフランシスコ初等中学からハイスクールへと進みましたが、ハイスクールは2年足らずで退学、その後は各地を転々として。そんな浩玻が飛行機に興味を持ち始めるようになったのは、25歳になった頃。ちょうどライト兄弟が人類初の動力飛行を成功し、全米各地で飛行大会が開催され始めた頃です。浩玻はこれらの飛行大会に触発され(とされています)、「飛行機」の研究に没頭するようになりました。そして現地日本人会の支援により、サンディエゴの飛行学校へ入学、念願のパイロット技術をマスターすることができたのです。



武石の飛行を見守る群衆。

■渡米から10年、浩玻は自分で設計した飛行機と共に日本への帰国を果たし、初の民間人パイロットとして日本の空を飛んだのです。民衆に「空の時代」の到来をアピールした武石浩玻。しかしその翌日に、痛ましい事故により、命を落としてしまいました。

イワシのフライを食べ、ブドウ酒を飲んだ
那珂湊の人々!

■日本がまだ“鎖国”をしていた江戸時代後期になると、黒船(船体を黒く塗った欧米船)が日本近海にも現れるようになりました。文化四年(1807年)6月をはじめに茨城県沖にも姿を見せ始め、湊・平磯沖にもしばしば出没するようになり、水戸城下ではその度に“黒船さわぎ”がおこっていたほどでした。

■そんな中、安政二年(1855年)4月16日に黒船が現れました。しかし湊村組頭・久四郎および船頭一同は、恐れるどころか、小船に乗って黒船に乗り移ったといひます。なんて恐いもの知らずで新しいモノ好きな人達だったのでしょ。…しかもそれだけでなく、ちゃんと黒船内を案内してもらい、挙げ句の果てには「鰯のキヌカケ(イワシのフライ?)」と「甘ドロシ酒(ブドウ酒)」までご馳走になって帰ってきたというから頭の下がる話です。隣の平磯村の鍛冶屋三郎ほか13人もまた、新しいモノ見たさで同じように小船に乗って黒船見物に出かけ、帰りにちゃっかり金ボタンやガラス瓶などを貰ってきた(しかし全て奉行所に取り上げられたとされています)という話です。

■湊・平磯といった“那珂湊の人々”の国際交流意識の強さのルーツは、もしかしたらこれらの事件にあるのかも知れません。

